

「感覚統合」の基本のキ

－「感覚統合」とはよく耳にするけれど、いったい何なんだ？－

「感覚統合」ということばは良く聞くけれど、一体何のことを指しているのかを、はっきりと説明できる先生は、知的障害特別支援学校の中においてはあまり多くないように感じます（特に小学部の低学年以外の先生においては）。

さて、感覚統合の定義から紐解いていくと、以下の様になっています。

「脳に入ってくるさまざまな感覚情報を目的に応じて整理し、秩序だったものに構成すること」

エアーズ(1920-1989)

まずは「さまざまな感覚情報」を読み解くのですが、「感覚」というとまず思い浮かべるのは「五感」ですよね。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚。感覚統合ではこれに加えて前庭感覚（平衡感覚）と固有感覚（腱や筋肉、関節などで感じ取る感覚）に注目をします。

例えば、感動的な映画を観ているとして、涙をぼろぼろと流しているときに、同時に味覚や嗅覚を研ぎ澄ませていることはないですよね。また、鳥のさえずりなど、聞き取りたい音があるときに意図的に目（視覚）を閉じたり、集中して勉強したいときには耳栓をして耳（聴覚）を塞いだりしますよね。要するに、人間は無意識の内に自分の中で各感覚に「青信号」と「赤信号」を出しながら情報の交通整理を行っているんです。そして、この交通整理や赤信号・青信号が上手く機能しないと、情報が交通事故を起こして「混乱」してしまいます。

また、五感と呼ばれる視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚は意識がしやすく、自覚をしやすい感覚ですが、前庭感覚（平衡感覚）や固有感覚は意識がしにくく、自覚をしにくい感覚ですよね（いつの間にかバランスを崩してしまうとか、船酔い

をしてしまうとか、身体
の位置関係を掴みきれず

に足の小指をぶつけてもだえてしまうとか…。なので、「視る力」や「聴く力」がどうしてもクローズアップされがちですが、意識しにくく自覚しづらい「触覚のつまづき」や「前庭感覚（平衡感覚）」のつまづき、「固有感覚（腱や筋肉、関節の感覚）」などに目を向けて、上手に交通整理ができるように支援・アプローチをしていくというところに「感覚統合」の大きな特徴があります。

